

創刊号 華山会報

平成10年10月11日

財団法人華山会



華山会報の発刊にあたって

財団法人華山会理事長 白井孝市

郷土の偉人渡辺華山先生は、寛政五年（一七九三）田原藩の江戸藩邸に生まれ、江戸末期田原藩政に寄与し、又我が国の洋学及び絵画史上に大きな足跡を残されましたが、近代日本の夜明に生きたその人と芸術は二十一世紀を目前にした今日でも、多くの人々を引きつけ、共鳴と崇敬を得ている所でございます。

財団法人華山会では華山先生顕彰事業の一環として、かねて全国の華山研究者の方や崇敬者の方々を結ぶ機関誌として華山会報の発刊を願っておりましたが、今回華山関係資料の収集と展示を行っている田原町博物館の全館完成と華山会館修復を機に創刊号を発刊することに致しました。

華山会報が皆様方の研究誌として、又会員相互の交流に役立つ会報として成長する様努めて参りたいと思っております。

編集は、華山・史学研究会の皆さんの研究成果を中心として、更に専門家の方々の寄稿を頂き、より充実し親しまれる会報にと思っておりますので皆様方のご支援ご協力をお願い致します。

田原の地におきます華山先生への顕彰の事蹟は、振り返ってみますと明治二十三年（一八九〇）華山五十年祭を営み、田原城三ノ丸に大徳徳碑を建立し、明治四十三年（一九一〇）には旧藩主三宅康寧^{やすなが}氏を会長として「華山会」が創立されました。華山会の事業として以後終焉の地池ノ原公園の公有地化と記念碑の建立、華山全集等の発行、華山文庫の建設を始め華山展や講演会の開催など多様に行われて参りました。

更に戦後華山神社や城宝寺の霊牌堂建設、池ノ原幽居邸復元、華山会館の建設などが行われ、昭和六十三年四月財団法人華山会として生まれかわり、田原町博物館の建設と共に、田原町と一体になり華山先生顕彰事業に取り組んでいる所でございます。

先人の足跡を重視して今後共華山先生の顕彰に努めて参りたいと存じますので華山会諸事業に皆様方の格別のご理解をお願い申し上げ、華山会報発刊のごあいさつと致します。



田原城跡

華山会の 設立経過について

昭和六十三年四月一日

財団法人華山会創立

初代理事長 山田一美

目的及び事業

この法人は、渡辺華山の封建的幕藩社会における武士、儒者、蘭学者、画家としての活躍を顕彰し、その生涯における作品その他資料を調査、研究するとともに、これらの作品を収集管理して一般に公開することにより、本県の文化意識の高揚を図り、もって社会教育の振興に寄与することを目的とする。

この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 渡辺華山に関する調査研究
- (2) 渡辺華山に関する講習会及び講演会の開催
- (3) 渡辺華山に関する刊行物の発行
- (4) 田原町から委託を受けた博物館、民俗資料館及び諸施設の管理運営
- (5) 渡辺華山に関する作品その他関係資料の展示及び保存

(6) その他目的を達成するため必要な事業

平成五年 第二代理事長 柴田芳三

平成五年四月二十六日 田原町博物館開館

平成七年 第三代理事長 白井孝市

従前の華山会の軌跡

明治四十三年五月十日 「華山会」創設

同年十二月三十日 「華山全集」第一巻出版

大正三年九月一日 錦織剛清氏 華山銅像建設

大正四年一月十日 「華山全集」第二巻出版

昭和九年 田原城の二ノ丸 華山文庫建設

昭和十五年（東京） 華山先生百年記念遺墨展開催

昭和二十一年 静岡県引佐郡井伊谷宮の仮殿を譲り受け田原城腰曲

輸出丸跡に華山神社を移築竣工

昭和二十九年 華山会長に町長就任

田原町長 藤代佐一

昭和三十年 華山関係資料二十四点

城宝寺華山先生霊牌堂及び建設記念碑建立

池ノ原公園幽居邸復元

昭和三十一年 池ノ原華山先生銅像再建

重要文化財追加指定

昭和三十二年 華山関係資料八点

昭和三十四年九月二十六日 伊勢湾台風で華山神社倒壊

昭和四十一年十月十一日 華山神社再建

昭和四十二年 華山会館竣工

昭和四十七年 華山先生百年記念遺墨展開催

昭和六十一年 「華山名作展」開催

「華山先生百年記念遺墨展開催」開催

目次

題字「華山会報」華山会理事 小澤耕一

P 理事長あいさつ

P 華山会沿革・目次

P 画家渡辺華山の心象 『黄梁一炊図』

P 渡辺華山・略伝

P 華山史跡

P 池ノ原公園（田原町） 松蘿園（熊谷市）

P 紀行文『参海雑誌』前編 各地の博物館をたずねて

P 「高野長英記念館」 華山・史学研究会

P 華山先生『訪舘録』 十年のあゆみ

P 私と華山 の古里を訪ねて

P 田原中部小学校児童 田原町博物館から

P 展示・行事案内

画家渡辺華山の心象

重要美術品 黄梁一炊図

天保十二年（一八四二）絹本着色

縦一四六・〇cm 横七一・〇cm



この作品は、中国唐の時代、盧生（ろせい）という青年が志を抱いて、邯鄲（かんたん）まで旅をして来て、道者呂公に出会い、呂公から借りた枕で眠ります。すると、夢で、官吏試験に合格し、立身出世し、宰相となつて子孫は繁栄し、八十歳になったところで目が醒めま

す。これは、この夢は黄梁の煮える間の一瞬の間のはかない夢であつたという「盧生の夢」という中国の故事を描いています。華山は死を決意してこの作品を描き、自らの人生を作品に投影しているようです。庵や人物の配置構成は、明の人朱端（しゅたん）の原

画からの摸成作品と思われませんが、背後にそそり立つ崖や険しい山中に立つ馬が繋がれている樹木には、華山独特の切り裂くような緊張感が見られ、自刃を前にした荒涼感で、よりうらぶれた寒村の雰囲気と華山自信の殺気を感じさせます。款

記に「子安（しあん）」を、印に「摹古（もこ）」を使用していま

す。「子安」と「摹古」を組み合わせた作品は、この作品の他に『千山万水図』があります。いずれも天保十二年の最晩年を代表する華山の二作品です。また、この作品は絶筆といわれ、華山が自らの一生を振り返り、この黄梁一炊の図の夢のようであつたと考えていたのではないのでしょうか。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌

渡辺華山・略伝

華山は、寛政五年（一七九三）九月十六日、田原藩仮取次十五人扶持渡辺市郎兵衛定通、二十九歳、母栄二十二歳の長男として、江戸麹町の上屋敷で生まれました。渡辺家の祖は、越後において八百石を給されていましたが、田代図書の子、権右衛門定重の代に、三宅土佐守康勝に仕えて百石五人扶持を給され、この時、定重は微録を恥じて、せめて数百石になるまでと、母方の姓である渡辺を名乗ったといわれています。定重を渡辺家の初代として数えると、華山は第七代にあたります。

華山の出生は、田原藩第十一代、三宅備前守康友の時代です。幼名を源之助といい、後に主君より虎之助の名を与えられ、その後、また、登の名を賜りました。藩公文書や日常の呼称は、のぼり、戯墨、俳画、紀

行文などには、のぼると書いています。諱は定静、字は伯登、子安といひ、号は、初め華山、三十四歳頃から華山と号していました。他に、金叡宮、金叡居士、玉壺宮、寓画齋、楽堂主人、松窓、耕硯田夫、観海居士、随安居士、昨非居士、全楽翁、主一道人、帰愚等が使われていますが、仏画には、大乘弟子驢提居士と記し、堂号を華山堂、寓絵堂、写物堂、全楽堂、提葛堂、樸全堂、瘦寿書屋、秀凝堂、晚翠楼などいっていました。

華山が初めて出仕したのは、寛政十二年八歳の時で、世子皇昌君のお伽役として日勤の奉公をつとめました。

華山が将来、大学者を志して学問の道に入る決心を固めたのは、十二歳の春のことで、病父の薬を求めるため、日本橋付近を通行中、池田侯若君の行列に行きあたり、暴辱を受けたことがその発憤の動機でした。この頃、すでに家庭では、華山の弟妹四人が生まれており、家計の貧窮は激しく、学問をするだけでは一家

の急場をしのごうことはできませんでした。そこで、幼少の頃から得意であった画業によって一家を助けることを余技としてはじめたわけであります。

儒学を藩老・鷹見星臯に、画を町絵師・白川芝山について学ぶのですが、授業料が払えず、町絵師からは破門されてしまいました。その後、親身になって指導してくれた師は、藩主の親戚である旗本大森勇三郎の家臣・金子金陵でした。金陵はさらにその師・谷文晁に華山を入門させ、ここにおいて画道の習練はますます磨きをかけられたのであります。華山十七歳の時でありました。

華山の弟妹は七人ありましたが、修業中の画業では、貧窮の一家を支えるには、遠くおよびませんでした。この頃、父定通は、年寄加判で二十人扶持を給されておりましたが、貧困のため、弟たちを次々と寺奉公に出し、妹たちは旗本奉公に出して口減らしをするより一家を救う道はありませんでした。

文化八年（一八一）学問の師・鷹見星臯が世を去ったので、佐藤一斎に師事することになりました。

華山は、谷文晁から多くのものを吸収しています。まず早暁の勉強であります。これは、灯油を節約することができるとし、睡眠後の頭脳に新しい知識を植え付けることができるとし、また、一日の時間割りを作つて、時間の浪費をばぶき、生活を規正して行きました。文晁塾「写山楼」に蔵する古書画から、中国、日本各派、画論を研究することができました。華山の人柄とその勉強振りに好感を持った文晁一家は、華山のために仕事を与え、画壇への進出を斡旋してくれました。華山二十歳の時は、百枚一貫文の灯籠画を描いて生計を助けたと記録されており、これらの内職は、それ以降もずっと書き続けておりました。

文政元年（一八一八）の頃は、江戸文化の類廃期で、家中の風紀も大変乱れており、華山は、藩政改革の意見書を上申したのですが、許され

ず、また、この頃、長崎遊学を志したのですが、父の憂苦に遭い果されませんでした。しかしながら、この年、華山は画道においても独自の画境を開いており、十一月藩侯康和に従って田原へ出発前に、一日二夜を費やして『一掃百態』の画冊を描いております。同年、江戸で発行された『諸家人名録』に、「画・華山、名・定静、字・子安、全樂堂渡辺登」と登録されております。

翌文政二年三月には、日本橋浮世小路の百川楼で、自ら書画会を開くようになりまし。六月からは、納戸役を退き、和田倉門改築の番士として工事を監督しておりますが、田原藩は当年より五力年の俵約令をたしてあります。

翌文政六年、華山三十一歳の時、同藩士、和田伝の娘たか十七歳と結婚して、自省の「心の掟」を定めております。

一、両親をとほしからず致すべきよう心得ること。学問をして遠く慮り、画をかきて急を救

つこと。書物は経書、画書より外見るべからずこと。

一、交わる人はためになる人を選び……

などが記されています。

文政七年には、父の定通が長病の末、亡くなったので、忌明けとともに遺録八十石を家督相続しました。

文政八年、この頃から松崎慊堂に師事し、また心を洋字に傾けるようにもなりました。

六月二十九日、門人椿椿山とともに上総、下総、常陸、武蔵の利根川周辺を旅し、『四州真景』四巻をつくりまし。華山の画は、独特の枯れた線描に加え、西洋画法を巧みに融合した南画であります。

文政九年、華山は取次役となり、この年、江戸本石町長崎屋に來宿したオランダ使節ビュルゲルと対談して西洋事情を調査研究しました。この頃、雅号を山冠の華山と改めております。

翌文政十年、藩主康明が逝去し、姫路藩から急養子を迎えたわけです

が、この人が十四代田原藩主・三宅

康直侯であります。華山は、文政十一年五月二十一日、側用人中小姓支配となり、隠居友信の附を兼ねるようになりました。華山は巢鴨にいる友信侯に学問を進め、特に蘭字の研究は、その後の日本の開化のために大いに力を注ぎまし。この翻訳については、友信ひとりの手におえるものではなく、高野長英、小関三英、鈴木春山などが雇われてこれに当たつたといわれています。蘭書を多く所蔵する所へは、研究者の交流も多かつたようです。幡崎県、松平内記、羽倉外記、江川英龍、斎藤弥九郎、川路聖謨、下曾根金三郎、奥村喜三郎、内田弥太郎などが親しくなりました。

天保二年（一八三一）八月、田原藩では、上屋敷の武芸稽古所を開放して、藩の子弟の教育の場に当てることにして、藩命により、華山は、文武稽古掛指南世話役となりまし。この年九月二十日、門人高木梧庵を伴って、相州厚木に旅をして

『游相日記』を書き残しています。

十月十一日、再び梧庵を伴って、上毛、桐生、足利に遊び、『毛武游記』を書き残し、十一月七日には、家譜調査のために上州・武州甄尻に旅をして『訪甄録』をあらわし、十二月四日、江戸に帰っております。

十二月十二日には、祖母おりんが九十六歳で亡くなりました。

天保三年五月十二日、華山は家老職になります。禄百二十石を賜り、友信御用も命ぜられております。また、この年海防事務掛となり、直面した事件には、紀州難破船貨物横領事件の解決と助郷免除申請の二つで、いずれも農民救済の治政でありまし。難破船事件の解決には、翌年までかかりまし。少々の償い金でやっとおさめることができまし。

天保四年一月二十二日、三宅家系譜及び友信公の三河志の御用で、田原に旅してきました。領内村々を廻り、鹿狩にも参加しております。この時の様子は、『客参録』に記され

ております。四月、三河地方を調査して、紀行文『參海雜志』を残して五月江戸に帰っております。

天保五年、華山は、農政家・大蔵永常を推挙して藩に雇い、六人扶持を与えて農政殖産の指導を依頼しました。

天保六年（一八三五）十一月二十一日、飢饉対策として義倉「報民倉」が建設されました。天保七年、春より夏にかけて気候不順で冷害と台風の大被害を受け、この秋から翌八年にかけて大飢饉が到来しました。康直は救荒指令として華山を田原へ呼ぼうとしましたが、華山はいにく病床にあつて起きられず、用人真木定前を代行として田原へ派遣し、救荒手当の施策を受けました。華山起草の『凶荒心得書』によりますと、上下一体となつて協力して、一人の餓死流亡者も出さず、凶荒を乗り切つたため、翌九年八月十七日、田原藩は、幕府より全国で唯一表彰されました。

華山は、所蔵する書籍、書画幅、

法帖を後進のために使つて下さいと藩主に献上しました。またこの頃、『退役願書』、『駄舌小記』、『駄舌惑問』を草し、『慎機論』の草稿を作っております。

十二月九日、華山は儒学者・伊藤大三郎（鳳山）を十人扶持で藩校成章館の講師に雇いました。

前年の天保八年六月、浦賀において米船モリソン号の砲撃事件、続いて九年十月、浦賀沖合へイギリス船が出没するという報に接し、幕府は、緊急に江戸湾防備の固めを嚴重にするため、沿岸の測量を計画しました。はじめ、測量方に目付鳥居甲斐守輝蔵を正使とし、代官江川英龍を副使として、天保十年一月から実施にとりかかりました。鳥居は、儒学者の元締・林述斎の子として生まれ、旗本鳥居家へ養子した人で、洋学嫌いの保守派の人でしたが、江川は蘭学を修めて西洋文明撰取の開明派でしたので、両者の意見は一致せず、江川は、別個に測量の命をうけ、華山に技術者や器具の斡旋を依頼してき

ました。華山は、長英の門人の中から、奥村喜三郎、内田弥太郎の二名を紹介しましたが、奥村は、鳥居の妨害にあつて出役できず、代わりに田原藩士で数学や剣術に抜群の技を持つている上田喜作を派遣し、最新の測量器具なども提供しました。

華山はまた、江川の要請によつて、海防意見書の原案ともなるべき『西洋事情御答書』、『外国事情書』、『諸国建地草図』などを起草して届けております。陪臣の華山は、直接幕府と国事を謀ることができなかったから、江川を通じて自分の献策を行ったのでしよう。江川家所蔵の『諸国建地草図』には、フランス（パリ）、イギリス（ロンドン）、ロシア（レニングラード）、トルコ（イスタンブル）、ドイツ（グダンスク）、オランダ（阿姆斯特ダム）、清国（南京）、ポルトガル（リスボン）などの首都周辺の地図を描いて、首都はみな沿海より内陸にあることを示し、日本における江戸の場合と比較して、その防備の策を論じています。さらに、江

戸湾周辺の地は、合わせて三万石程度の兵力で、全く内患予防の配置であり、対外国船の襲来には無防備であること、沿岸に築城し、海の深淺を測つて砲台を構築することを進めております。当時にあつては、驚くべき周到な献策でありました。

この測量は三月に終わりましたが、江川の測量の方が優れていて、鳥居は全く面目を失つてしまいました。鳥居は、この屈辱から、蘭学者弾圧に一層の拍車をかけるにいたり、部下の小笠原貞蔵、大橋元六らに命じて密かに無人島渡航事件を探知し、華山や長英がこれを指揮しているかのように作り上げ、華山はまた大塩の乱に気脈を通じていたという噂で、花井虎一に訴えさせ、こうして壘社の獄が始まったのであります。

五月十四日、華山は、北町奉行大草安房守役宅から召喚を受け、舅の和田伝が付き添つて出頭したのですが、そのまま揚屋入りとなつてしまいました。同日、家宅搜索の結果、『慎機論』や『駄舌惑問』など、未

定の論文やその他の訳本類が公儀に没収されたのであります。小関三英は、華山逮捕の報を聞くと、自分にも刑吏の手が及ぶことを予測して、書類を焼き捨て、証拠となるべきものを整理して自殺してしまいました。

五十三歳でした。高野長英は、一時姿をくらましていましたが、華山の罪を重くしてはならないと思ひ自首しました。取り調べの進むにつれて、華山や長英が無人島渡航計画や大塩事件に無関係であったことは判明したものの、華山の草稿である『慎機論』や長英の流布した『夢物語』が、幕政を非難して、外国事情を誇大に宣伝した罪に問われて重料になる心配がありました。

画道の高弟、椿椿山たちの交友によつて赦免運動が起こり、また、獄中の華山に不自由のないように、いろいろと差し入れが行われました。恩師、松崎謙堂は、華山の無罪を主張した長文の建白書を老中水野忠邦に差し出しました。このようにして、七カ月余りの獄中生活を終え、十二

月十九日、華山は、在所御預け蟄居の判決を受けました。

天保十一年（一八四〇）一月十三日、華山は江戸を出発し、二十日、田原に到着しました。家族は四日遅れで田原につきました。田原を去つた大蔵永常の旧宅地で、華山終焉の地となつた池ノ原邸に、獄中の病を治療しつつ、家族とともに貧しい生活を送っていました。

華山がいままで国元田原に来藩したのは、十六歳の時藩主康友に供して、二十六歳の時藩主康和に供して、三十五歳の時友信に随伴して四十一歳の時家譜編集・三河志の調査で三河地方を遊歴した時の四回であります。

蟄居中、華山一家は、母、妻、三児の六人暮らしで、大人は一人扶持子供は半人扶持、中間一人扶持を受けていました。屋敷は、一千五百坪ほどあり、元気になれば、畑作もできました。母や妻は、綿糸をつむいで内職をしていましたが、田原へ見舞いに来た画弟の福田半香たちは、

その窮状を察して華山の画を江戸で売却し、生活の資金を買いでおりました。華山はふたたび画によつて老母妻子を潤すことができました。雑事を離れて画業に専念できたせいか、池ノ原邸では、多くの傑作が描かれております。『海錯図』『鷗鷺捉魚図』『洋犬図』『翎毛虫魚冊』『ヒボクラテス像』『于公高門図』『黄梁一炊図』等の名品があります。

この頃、藩主康直は奏者番役を望んでいましたが、なかなか任命がありませんでした。重役・華山が幕政批判で罪を受け、しかも不謹慎に江戸へ執筆の画を送っているというところが、藩侯の栄進を妨げているなど、不穏な噂が起こってきました。華山は、主君や藩に災いの及ぶのを憂慮して、天保十二年十月十一日、『不忠不孝渡辺登』と大書し、数通の遺書を残して祐国の脇差で切腹、四十

九歳の生涯を閉じたのであります。門人、椿椿山あての遺書に「数年之後一変も仕候はば悲しむべき人もこれあるべきや、極秘永訣」と記し、

最後まで自己の所見と節操を正しいものと確信していました。恩師松崎謙堂は、愛弟子華山の死を悲しみ、「華山杞憂をもつて罪に罹り、また杞憂をもつて死す。悲しい哉」と痛恨の情を述べておられます。華山の死によつて、田原藩は公儀御預り人を死なせたことを畏れ、幕府から検死役が到着するまで落ち着きませんでした。北町奉行、遠山左衛門尉の与力、中島嘉右衛門、磯貝七五郎他同心三名が十一月五日に検死を行つてから、田原の城宝寺へ仮埋葬されました。初め、法名を「一心院遠思花山居士」といつていましたが、慶応四年（一八六八）四月十二日、北町奉行、石川河内守より赦免の達しがあつてからは、「文忠院華山伯登居士」と改められ、子息小華によつて墓碑が立てられました。

明治三十四年（一八九一）十二月十七日、没後五十年目にして朝廷より正四位を贈られました。

理事 加藤寛二

華山史跡

池ノ原公園(田原町)

池ノ原公園は、田原福祉専門学校の北側にあります。ここは、渡辺華山が晩年暮らし悲劇の最期を遂げた場所として知られ、華山自身も手紙に「池の原」と記しており、華山ゆかりの重要な史跡となっております。

池ノ原公園の整備は、明治四十二年に始まります。この年華山会設立準備事業のひとつとして屋敷跡の用地確保、公園化及び東郷平八郎筆「華山先生玉碎之址」の碑の建立が行われました。

明治四十三年、華山会の発足とともに「池ノ原公園」と命名され、大正三年には、錦織剛清氏寄贈の華山の銅像が建立されたのですが、残念なことに、この銅像は昭和十八年、太平洋戦争の資材に供出されました。昭和三年には、華山会により「不忠不孝渡辺登」の碑が公園内に建立

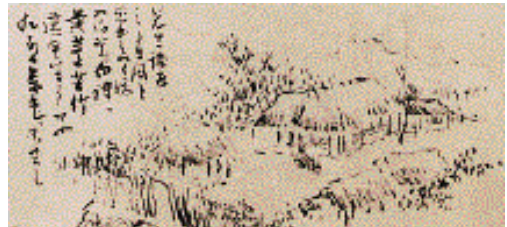
され現存しています。

昭和三十年、「渡辺華山関係資料」が国の重要文化財に指定されました。銅像は日展彫刻家小田寛一氏に依頼し再建しています。また、有志の寄付及び勤労奉仕により、屋敷と機織小屋の復元も行われました。復元した屋敷の傍らには、華山直系の画家松林桂月氏題字の石碑「華山先生幽囚の家」が標されています。そして平成五十七年に田原町が公園の南側敷地を購入し、愛知のふるさとづくり事業の一環として新たに整備を行いました。この整備では散策路



現在の池ノ原公園

四阿、華山の生涯を刻したオブジエなどが整備され、新しい池ノ原公園としてお目みえしました。この整備により当時の屋

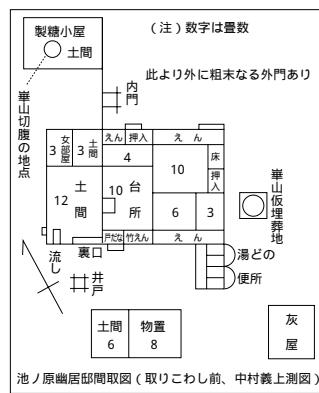


椿椿山画 幽居園 『錦心図譜』より

敷地のほぼ全域が公園化されています。現在は周囲に学校も多く賑やかで、華山が住んでいた当時は景観も大きく変わってしまいました。華山が淋しく過ごした空気を感じられせん。

華山は池ノ原の様子を友人に宛てた手紙に「狐、蛇が出るようなさびしいところ」と記し、住居については「低い身分の狭い屋敷だが、築七七年で新しくきれいである。敷地は千五百坪ほどあり、元気になれば畑も耕せる」と記しています。弟子椿椿山が記した屋敷の図には、竹藪に囲まれた草葺きの建物が描かれています。後方に山が見えることから南或いは南東方向から描いたようです。

その他屋敷の取り壊し前に写された間取り図も知られていますが、当時の池ノ原屋敷と周辺の景観を知ることができる貴重な資料です。しかし、現在の復元された屋敷と



『田原町史』中巻より

当時の屋敷は外観はもとより間取りも多少異なっています。華山が自害した製糖小屋は現在の銅像付近で屋敷の正面も南側に向いていました。いつの日か厳密な検証によって、史実に基づいた復元が行われることが望まれます。

周囲の路地には武家屋敷の土手や椿の生け垣がみられ、往時の様子を留めています。これらの景観とともに池ノ原公園を、華山を偲ぶ歴史公園として後世に伝えたいものです。

小川金一 増山禎之

松蘿園(熊谷市)

ここで紹介する華山関係の史跡「松蘿園」は、埼玉県熊谷市大麻生中郷に現存する家屋です。名前の由来は文字通り、松と蘿がこの庭に多くあったからだそうで、今日でも隣家との境界の塀には蘿がのたつていました。



大麻生は荒川の左岸に位置しており、地形的には荒川の氾濫原で、自然堤防上に立地した集落といった様

相を呈しています。そして、現在の国道一四〇号線(旧秩父街道)から秩父鉄道の大麻生駅方面に入ったところの右手に「松蘿園」があります。

「松蘿園」は、今を去る百六十年前、「造り酒屋」古澤槐市氏の「来客用の離れ」として建築されたようです。外見は至極質素ではありませんが、内部は数奇を凝らして作られています。地元の方々に、「松蘿園」と聞いてもわかりませんが、「渡辺華山が泊まった家」と聞けば、ほとんどの方は知っています。この古澤家は、明治四年頃、川本家に売却されてしまいました。当時、古澤家と川本家は縁続きの関係にあったようで、この四百坪の敷地の一角に、幸いにも華山の泊まった「松蘿園」が現存しているのであります。

華山との関係は、天保二年(一八三二)に華山が当地を訪れたとき、宿舎として使用された家屋がここです。華山はこのとき藩主三宅家の系譜を作る目的で隣村の三ヶ尻を調査しました。昼間は三ヶ尻村の龍泉寺

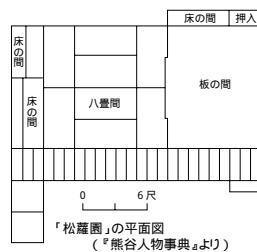


で作業を行い、夜には「松蘿園」に戻ったようです。そして、『双雁図』などの作品を描いたり、『訪舘録』を完成させたのであります。

家屋の規模は四間×二間半の建坪で、八畳の畳敷きの部屋と六畳の広さの板の間からなっています。それに、南側には三尺幅のぬれ縁と廁がついています。

特に注目を引くのは床の間で、建築専門家の意見を参考にして解説を試みると、床の間の間口は十二尺で、向かって左の本床部分に六尺五寸取り、右側の脇床に五尺五寸を使

うという方法で調和を保っています。本床は、樺材の一枚板を使い、奥行きは浅くなっていて、外側の壁と遠近調整用の壁とが平行になっていてこの中に人間が入れる程度の空間が出来ているのです。



現在建っている場所は、華山が寝起きた当時とは異なり、南側に一〇メートル

トルほど移築されてきました。地元の方の説明によると、華山が過ごしたところのある家屋で現存するものは、日本全国でここが唯一であるとのことでした。そして、できることなら市の文化財に登録し、保存したいとお話もつがいました。つぎの機会に『訪舘録』のふるさとを訪ねることができたら、文化財となっているであろう「松蘿園」を訪れてみたいものです。

林 哲志



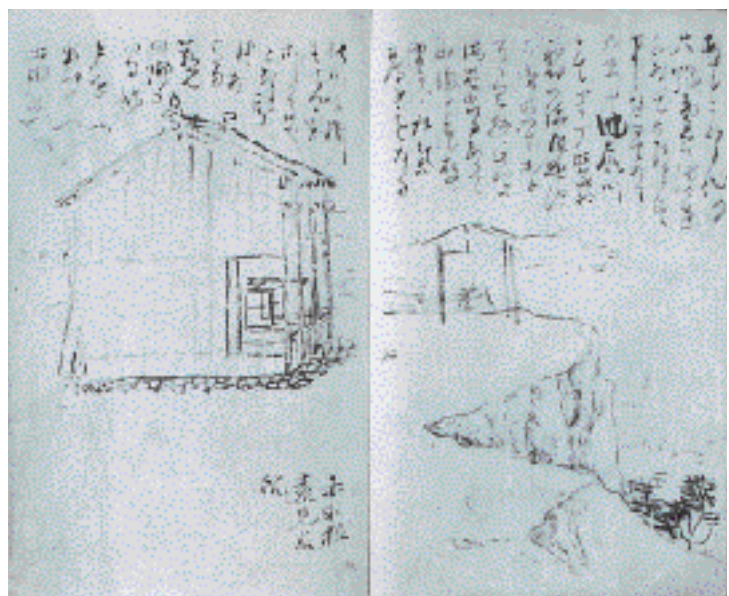
華山は、四十九年の短い生涯ではありましたが、日記、絵控、縮図、紀行、著作など、数多くの自筆の記録が残されています。その中でも、目にした実景を多数の写生図に描いた紀行文は、芳賀徹氏のことばをかりていえば、「十八世紀なかばからの知的旅行者たちのあとにつづく一人であり、実学的、記録的旅行記」であります。

大山街道に沿った街道筋の人々のありさま、商人、農夫、馬喰、俳人、盗賊、師匠、医師、侠客など無限の趣をたえつつ展開する田園風物詩の游相日記、三宅康貞の移封年月考証からはじまって、三ヶ尻の『形勢』、『疆域』、『形勢』、『賦役附沿革』をあらわし、よく地誌としての体裁をなしている訪舘録など、豊かな诗情と交錯して、鋭い観察を盛り込むなかに、華山の寛恕たる人柄を彷彿とさせる新しい旅行記であります。華山会報発行にあたって、華山の人となりを直接読み取っていたり、前編、後編の二回にわけて紀行文の抜粋を紹介します。

天保四年（一八三三）正月、華山は、帰藩中の藩主の招致によつて、生涯四度目の田原行きとなり、蛮社の獄の後の塾居と自決のための田原下りを別にすれば、生涯最後の旅行でもありました。三ヶ月余の滞在中、藩侯の命による系譜調査と友信公三河志の調査のために、天保四年四月十五日赤井喜六、鈴木俊二の二人を伴つて田原をたち、渥美半島南岸（太平洋岸）の領内の村々をたどつて、領外の伊良湖から神島にわたり、渥美湾を引き返して岡崎、豊橋（吉田）經由で田原に帰る、という五日間ほどの旅の見聞録であります。ここでも、こまやかな観察のなかに人間華山が躍如として私たちを惹きこんでくれます。

高松の富士見茶屋で昼飯を食べ終えた。田原からこの村までは二里である。又一里で赤羽根村という所に出る。ここはこのあたりの土の色が朱赭（朱赤）のようであるのもつて、本来は赤羽丹であるのをこのように誤つたのであろう。

『赤羽根の浜に出づ。近頃異国の船我地方にいたり、ややもすれば漁船をかすめ回船をおびやすくすもて、官沿海地方に撒し、警衛を加えらる。我封地もまた土民におふせて、其備を嚴敷せられたり。近頃又遠見番所とて、異船の遠沖をわしる



赤羽根・遠見番所

を察せんがための所を設られ、遠眼鏡をもこの所に備え、いとおごそかなる御もふけなり。』
たいそう嚴重なご設備を備えてある。弓鉄砲をも別の所に役所があつてこれに隠し秘め、大砲台は浜辺にあつて、上陸をさせまいぞというおつもりである。

若見の里に入る。越戸を出る。土田、この地と



フウトウ

越戸とは、土がたいへん良く田圃に勢いがある。しかし、うしろに山が迫っていて、猪の心配が多いからというので、あちろちろに小屋を作つて、夜中じゅう猪を追い、鳴子を引くということである。ただ秋の末にだけ設けるものだと思つていたが、この地はいつもこのようだということがある。

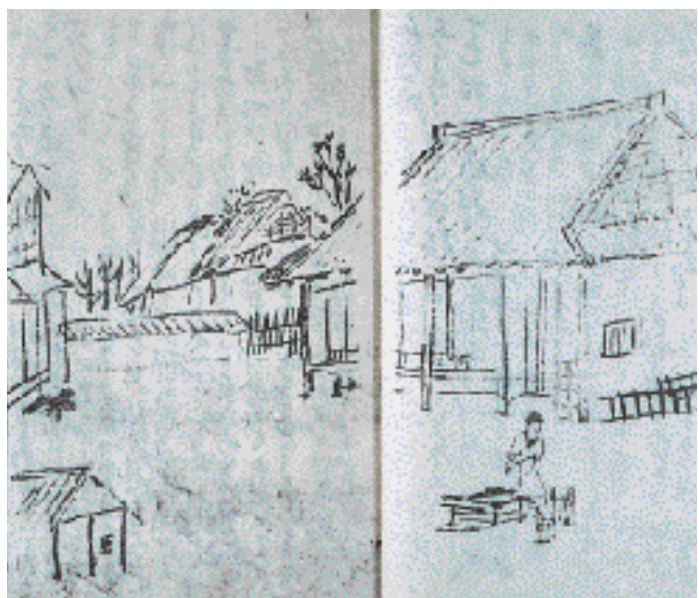
この地に医福寺という寺がある。覚明の自筆の大般若六百巻が今もなお残っている。それならばその寺に行つてみようと思つてみると、老いおとろえた老僧がでてきて、その経を皆取り出して示すが、いかにも古色蒼蒼すべきものである。いつまでも立ち去りがたくて、「さあ、もう日も暮れてしまった、宿をお貸し下さい」といって、僧もたいそう喜んで、

『近郷の同宗の法釈寺といえるに、山だち押入て寺某を打果し、小金を奪んとせしが、村人にしられてそのまま逃げ失せぬ。さりとはよにおそろしきもの侍ふもの哉。我老てかかる目見んもいとおそろしさに、村人を頼んといふに、又おのれおのれが家居あればうけひかず。御侍士の御宿り賜らんはこよなき幸なり、今宵はこころよく寐入なん、いざこなたえといふによりて、終に此寺にやどり、夜もふくるまで覚明が書経をつつす。』

寺の主人が疝氣を患つて薬湯を造り入浴する。

私にも入れと言つ。その造り方を聴くと、フウトウという草を煎じ、この湯の中に入れる。しかし、湯に草なども入つているので、別に煎じた湯も草もともに入れると思われる。ただ煎じ水ばかり入れるのではない。さて、この草はどこにもあるけれども、ただ和地に生えているのだけがよいということだ。だいたいこの湯に入ること二三日にもなるとどのような治りにくい病氣でも必ず効目があるという。

これよりは小塩津とよぶ村である。ただ麦畑と松林のみで特に書き記すべきものはない。喜六の縁のある者は、掘切村という所に住んでいる小久保三郎兵衛という農夫である。今の三郎兵衛の祖



三郎兵衛 住居

母である人は、喜六の父権左エ門の叔母であるということだ。今は亡くなつて長いこと経つている。その子も早世して、女の子等が多くあつて、今の三郎兵衛の名を喜六という者の養子にして、第一女である者に家督を譲つている。しかしながら、また家を興すことができるような力はないので、同じ姓である政右エ門が後見となつて、ゆつたりと暮らしている。

鈴木氏が訪れてくるのをこのつえもなく喜んで、一家を挙げてもてなす。私もまたその供膳にあずかったが、酒も鮎鮎うづどんもきれいでなく、麦をもとめて食べる。

この地では、他と違っていている事がある。月経のある女は別の家を作つて、自ら煮炊して食べ、家に入る事は許されない。

このようなことはおよそ十三日ほどであるという。この風習はこの地から伊羅子（伊良湖）に至るまでこうだという。これは、この地は古神領の地であるので、その風習が今まで残つていてのだと思われる。あの御厨七郷というのは、この村と亀山と中山・小塩津・日出・伊羅虞（伊良湖）・保美の七郷だと言つことである。

これより神島に行こうとする。先ずいら子（伊良湖）に行こうとする。堀切山が尽きて縦横一里の大砂漠となり、西に伊良虞（伊良湖）の山が隔堀のように連なり、南に日出村の岡がある。この岡は昔は島山であつたようなので、伊勢の国に属してはいたが、後に三河の浜に連なつた。古い歌枕などにもいせの国（伊勢の国）いら子（伊良湖）とあるのを後の人は疑つようであるが、この堀切山を境にして海の内との間のおよそ一里の沙原を見て、いわゆる「蒼海変じて山となる」とい



伊良虞人

たのを思い出した。人が住んでいる家は明神の山下にあつて、ここからそこへ至る道は、ただ松原の間に人の道を開いてはいるが、皆砂浜で、言わば深い雪の中を行くようなものである。里人は牛を養つて、田圃に用事があつても乗つて行き来するようである。およそ、和地村あたりから、多く牛を養つて馬の用に当てている。みなこの地から御馬所という。山はみな放牧をするところで、山

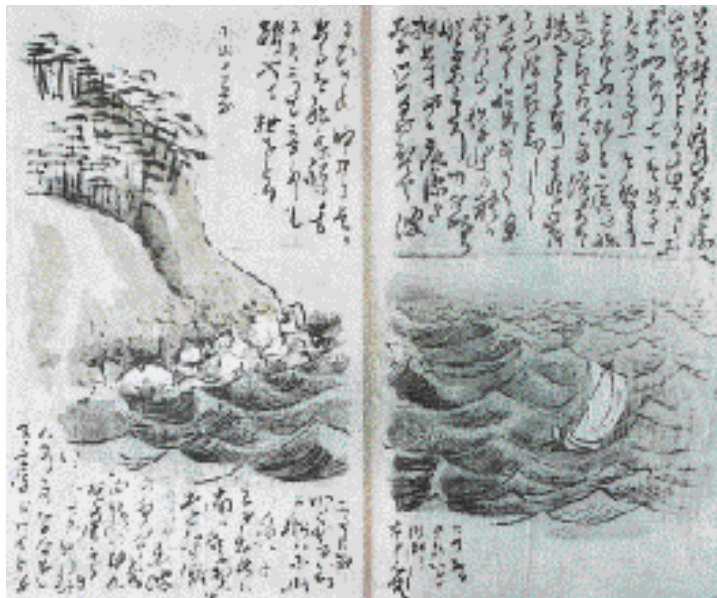
下は人が住んでいる家がところどころにある。多くは瓦屋である。これは海の風がたいそう激しいので、このようになったことである。

彦次郎という者は半農半漁であつて、このあたりの裕福な家の者であつたので、参詣する人はみな宿を借りるという。私は先の年この御神へ参詣した時、この家に泊まつたことである。

一昨日と昨日はおつむぞう（御衣）という御山の祭だということで、博徒がたくさん集まつて賭場を設けて、公をも憚らない様子だということである。そういうわけで、この彦次郎の家も博徒のために借り取られて、私が着いた時には、猶布団をひきかき寝惚け顔で逃げ去つた。こうしているうちに、船の準備ができたというので、御社にも急いで参詣して、浜辺に出た。

小山というのは、この磯つたいにある島山である。神島に渡るうとする時には、この山の上で火を焚くと、船を浮かべて迎えにくるといふことである。その火を焚くところは三箇所あつて、一つは公の事に、一つは急ぐ事に、一つは個人的な事だといふ。

今日は伊良虞の船を傭つたので、この浜から纜（ともづな）を解くのである。しかしながら、岸辺を打つ波が恐ろしくて、容易に船を出すことは難しく、私たちは船に乗っているの、船子たち



小山の鼻

が三人で力のかぎり押し出した。少し深い所へ出るや否や、船が波に引かれて沖に走り出るのを、船子たちが船の鱧(とま)にとりすがって、ようやくのこと船に躍りこんで舵を取る。その振る舞いは非常にきびきびとしていて、たとえようもない。

こうしているうちに、風も好いというこ

このような小さな船に五尺ばかりもある帆を斜めに張ると、船はますます矢の飛ぶよりも早くなつたが、船は帆に負けて傾きながらはしるので、波はまた大きくなって、高くなるものは縦十五丈もあるうかと思われ、横の長いのは四・五町もあるようだ。

このような大きな潮の青く澄み光るのが、見上げるほどに巻上げて船の中に向かつてくる。前に立っている船子がこの波がやってくるのを見て、声を上げると、後ろの者が声を合わせて舵をとり、船は波と風とのために右に左に傾きながら波の間を走り抜け、走り抜けながら、島をめざして行くほどに、かの有名なドワイというところに着く。

これほどまでに恐ろしい所をこうして逃れてきたのに、またこれよりも恐ろしい憂き目を見ることだと、いよいよますます恐ろしく思うと、あの遠く白い龍が争っているかと疑っていた所である。遠い波は垣根に咲く卯の花草に晒した布のようにも見えるが、近く目のあたりになると恐ろしいこと言つまでもない。白波の風に逆らつて争う様子を船の底から仰ぎ見ると、あたかも高嶺の花が散り敷くかのようにあり、また雪おろしとかいうものがなだれかかり、物を被い積み上げようとする勢いがある。大ゆれというものはおおよそ一里もあるうかと思われる間を、ただ一波の揺れ

動くものにて、こちらが低く、あちらが高くなるほどであるが、船は海底に沈むかと思つほどに、また数十丈も高くなって、言わば大山の絶頂を行くようである。船子が言つには、大地震が震るか、大風が吹く時は、大地の底を引き払つて、直ちに大空へ躍り上がるかのようなのである。これを津波というとか。聞くにつけ、見るにつけて、ただ胆がつぶれ、胸が一杯になり、物をいうことも出来な

い。
鳥が近くなつては、波の怒りも穏やかになつたが、ふつうの海とは違つたので、帆を下ろし、櫓を押ししても容易にはできない。やつこのことで、島の南の海辺に船をつけようとしたが、磯部は海が深く、波が逆巻き寄せようとするので引き返され、戻ろうとすると打ち寄せられてどうしようもない。船子たちは素早く碇をとつて投げ入れ、流れないようにして、網を持って磯辺に泳ぎ着き、力の限りに引張るうちに、やがてこの島の女子どもの腰巻だけをつけたのが幾人も群がつて来て、船引き寄せたので、船子たちは私たちを背負つて小高い岩の上に置き、荷物等運び、ただちにもとの船に乗り移り、碇を引き上げながら、潮に引かれて遠く漕ぎ帰つていった。(続)

華山・史学研究会長 渡辺巨祥



高野長英記念館

各地の博物館をたずねて
「高野長英記念館」
たかの ちようえい

水沢市中上野町1-9
交通 JR東北本線水沢駅下車

水沢市は岩手県の南西部に位置し、中尊寺で有名な平泉の北側にあります。JR東北本線水沢駅から南東に向かつて十分ほど歩くと、水沢公園があり、公園内に高野長英記念館があります。平成八年六月には、椿椿山筆の高野長英像や書状等五十八点が重要文化財に指定されています。

高野長英（一八〇四〜一八五〇）は、この水沢で生まれ、江戸に出て、天保三年（一八三二）頃から、渡辺華山の蘭学研究を助けました。天保飢饉にはその救済のために『二物考』（華山挿絵）を著します。天保十年五月の蘭学者弾圧事件「壺社の獄」では、幕府批判の罪を問われ、永年の判決を受けます。

市内には、長英生誕の地、国指定史跡高野長英旧宅（母の実家で、養父玄斎の家）、長英の墓（高野家の菩提寺、大安寺）もあります。駅前の観光案内所には、レンタサイクルもあり、電車で訪れても、便利です。

田原町博物館学芸員 鈴木利昌

華山・史学研究会
十年のあゆみ

平成元年に発足した華山・史学研究会は、渡辺華山の顕彰と次世代の人々への啓蒙、地域文化の振興に寄与することを目的として活動をはじめました。

毎月一回、土曜日の午後、華山会館に集まって、当初はおよそ十五人くらいの会員でスタートしました。「まずは、華山の直筆を読もう」ということになり、日記類や書簡類など、いわゆる古文書、くずし文字の輪読会となりました。

「華山さんの癖をつかめば、後は楽に読めるよ」と言われつつも、慣れるどころか、だんだんこんきくなってきました。しかし何とか、皆さんの励みで研究会も、すでに十年を迎えることができました。

この十年間に扱った華山直筆のテキストは下の表のようになります。

年度	テキスト名
平成元年度	游相日記
平成二年度	参海雑志・退役願書稿
平成三年度	慎機論・守因日記 他
平成四年度	客参録
平成五年度	全楽堂日録
平成六年度	全楽堂日録・毛武游記
平成七年度	毛武游記・四州真景 他
平成八年度	全楽堂記伝
平成九年度	全楽堂記伝・華山先生略伝補・訪舘録
平成十年度	訪舘録・游相日記

最近では、華山の文章が一般の方にも親しみやすく読めるようになり、現代語訳を付けることに取り組み始めました。今、十年前に扱った『游相日記』について、その作業を進めています。今後とも開かれた研究会となることを期待しています。

林 哲志



華山先生『訪甄録』の古里を訪ねて

我部山 正

訪甄録は華山先生が藩主三宅康直公から家譜の編纂を命ぜられ、藩祖三宅康貞公が徳川家康公から拝領した甄尻(現在の埼玉県熊谷市)の地を訪れ三宅家の遺蹟を調査し、藩主に献上した報告書であります。

本書は序文、上巻及び下巻よりなり、更に図絵二十枚と甄尻全図、路程図が付されています。先生は本調査に当たり日本書紀等古典五十八冊を参考として甄尻を考証しています。まさに現代で言う総合的な地域研究報告であります。

研究会では本書の読了を機に去る八月二十二、二十三日現地を視察研修して来ました。熊谷市には華山、訪甄録の研究者がおられ、それらの諸先生に案内と説明を頂きました。最初は先生が滞在された龍泉寺を訪れました。仁王門及び観音堂が先

生のスケッチそのままの姿で百六十余年前の形で残っており、仁王門の天井絵「松之図」有名な「潮音」「貞賢」等の書、「双雁図」等いずれも県指定文化財となっており、後世松林桂月等多くの文人墨客が訪れ県下有数の名刹となりました。

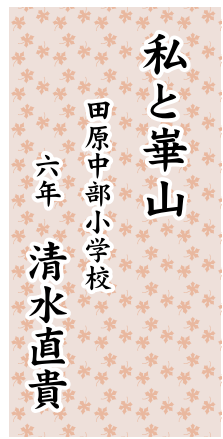
江南町の持田家には先生設計の庭が現存しており、当主宗右衛門に贈った「華山の遺墨」を初め先生直筆の絵画を多数見せて頂きました。

最後に訪れた大麻生の「松蘿園」は、先生が滞在した現存する唯一の建物という事で市指定の文化財として保存を計画しているようです。

今回の研修で訪甄録の総てがこの地に残っている事を痛感しました。又、先生がこの地を訪れる途次滞在した桐生及び足利の地での紀行『毛武遊記』も忘れてはなりません。

これらの先生ゆかりの地域の方々と是非共華山先生の遺業をたたえ、あわせて町おこし事業として近い将来「華山サミット」を開催しようでは

ありませんか。



私と華山

田原中部小学校

六年 清水直貴

華山劇「板橋の別れ」の華山の役を演じることに決まった時、「まさか。」と思いました。歌のテストでは、いつもの練習よりうまく歌えたので、ちよつと安心しますが、他に数人の候補者がいたので、歌かせりふのテストのどちらかで落ちると思っていたからです。

劇の練習に入る前に、ビデオを何回も何回も見ました。ビデオを見てみると、中部小学校に入学して以来毎年見ているけれど、いつも感動していたことを思い出しました。その感動を見せる側で演じることが、とてもうれしかったです。

弟と別れるシーンがあります。僕は、そのシーンに一番感動していています。貧しいために、弟を寺奉公に出してしまつたころは、今では考えられない事です。

華山先生は、子供の頃は虎之助と言います。僕は虎之助はとても強い人だと思っています。貧しさの中にいても武士の心、強さとやさしさを持っていてと思います。寺男が手を引いて連れて行く別れの場面で、虎之助が「熊次郎」と呼びかけます。その時は、本当に自分が虎之助になったような気がしました。

劇の中で虎之介が独唱するところがあります。その歌の中で「あんなつかしき弟よ。」と弟、熊次郎のことを歌う歌詞が僕はとても好きです。華山先生を何度も演じていると、なんだか華山先生がすごい人だと今さらながら思っています。

僕は、体をきたえるためと、精神力をつけるために、空手を習っています。習い始めてもう八年になります。これからも続けるつもりです。そして華山先生のように、強さとやさしさを持った人になりたいです。華山先生を演じることができ、華山先生の心といくらかでも向かい合うことができ本当によかったです。

田原町博物館から 展示・行事案内

平常展のご案内

観覧料 一般二〇〇円（一六〇円）

小中生二〇〇円（八〇円）

（ ）内は二十名以上の団体の料金

九月二十九日～十一月十五日

国指定重要文化財 渡辺華山

関係資料展

十一月十七日～十二月二十七日

華山と小華の弟子を中心に

一月五日～二月二十一日

華山とその友・弟子

二月二十三日～四月

谷文晁・渡辺華山から渡辺小華まで



町文 渡辺華山筆
湖石白猫之図

行事のご案内

十月十一日(日)午後一時三〇分

展示解説

講師・博物館調査員 加藤寛二

十月二十四日(土)午前九時

秋の学習会「日本の三彩と緑釉

―夫平に咲いた華―「復元猿投窯

展・大石訓義の復元20年―」

愛知県陶磁資料館で開催中の特

別企画展「豊田市民芸館等を見学

定員五〇名(先着順)

参加料 二千五百円、申込制

十一月一日(日)午後一時三〇分

展示解説

講師・博物館学芸員 鈴木利昌

十一月十五日(日)午後一時三〇分

講座「近世城下町田原の地域構

造」

講師・愛知県立福江高等学校教

諭 林哲志

定員三〇名(先着順)

会場 田原町博物館研修室

参加料 無料、申込制 十一

月八日(日)までに



華山史学研究会が、重要文化財『華山先生略伝補』（田原町所蔵、三宅友信筆 明治十四年に執筆。幕末に編集された清宮秀堅『雲烟略伝』の渡辺華山の伝記を増補して、著したもの）の読み下し文と口語訳を編集しました。華山会館・田原町博物館にて、先着順にて配布していきますので、お申し込みください。

華山会報 創刊号

平成一年一月二日

編集発行 財団法人華山会

事務局長 中神洋一

千四四一―二四二

愛知県渥美郡田原町田原巴江二の二

TEL 五三二一・二一・一七

FAX 五三二一・二一・一七

編集・協力

田原町博物館

館長 鈴木啓之

副館長 加藤 均

係長 寺田博隆

学芸員 鈴木利昌

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

林 和彦

山田哲夫

林 哲志

柴田雅芳

加藤克己

福井半治

鈴木 実

大羽良枝

尾川新一

我部山正

小川金一

増山禎之

中神昌秀

小澤耕一

加藤寛二

華山会・理事

華山会報ご希望の方は華山会館・田原町博物館にお申し出下さい。